

# 利島椿林の病虫害と管理に関する調査研究



平成27年9月

利島椿研究会編

# 利島椿林の病虫害と管理に関する調査研究



平成 27 年 9 月

利島椿研究会編



## まえがき

本編はツバキの病害虫対策や後継樹作りなどについて、利島椿研究会の調査研究他について牧野洋二の調査時メモ等を元に取りまとめたものである。

私は樹木の病害虫防除研究に長年携わってきたこと（樹木医）や、森林保護・造成部門を専門に調査研究してきたこと（森林部門技術士）から、尾川武雄氏の推薦を戴き、牧野の手配によって本会には平成7年の創設時からご縁を頂いている。

利島への初上陸となった平成7年7月1日、驚きの連続で島を巡らせてもらったことが今も新鮮に臉に浮かぶ。美観的にもすばらしい段々畑をしつらえ、整然と植えられたツバキの大樹、刈り払った雑草等を燃やす香ばしい煙、神域の靈気のオーラを降り注ぐシイノキなどの巨樹、美味しそうな山菜モミジガサを「厄介な害草」という人達。・・・ただ、ただ感動であった。

本題のツバキであるが、予備知識をうれしく裏切る大きな広がりようと多様さに圧倒され、栽培250年という歴史の重さをずっしり感じたものだ。しかしと、やはりというかヤブツバキ1種の単純林のうえ、老木も多きことから、病害虫の発生もツバキ特有なものが偏って発生し、激しい被害のものもあった。これらの一部については東京都林業試験場の調査報告もあるが、ツバキ栽培者がおりに触れ必要とする、より細やかで、広範囲かつ早急な対処を求められる病害虫対策や後継樹育成法について、これまでの成果を整理して保存し、後代まで利活用を計るべく発刊したものである。

私は病害虫対策を中心にした他、栽培、剪定、後継樹育成にも提言してきたが、全般の世話・手配等の全てを牧野が担当し、後継樹育成は尾川武雄が指導したものである。

椿林の樹下は総じて暗い。これは除・間伐が進んでいない為であり、花を着け実を稔らせているのは、最上部の表面だけとなっており、ツバキの本数は多いながら立体的な着果が無いので収穫は少ない、収穫増のためにも間伐は早急な課題といえる。台風害を予防するには常襲方位については林内に風を入れないように、多少弱めの間伐もやむをえないかとも考えるが、基本的には規則的な間伐が理想である。

但し優良種実の成り木は大切にしたいので多少のかたよりはいたしかたない。縮伐や極端な剪定は労多くして、結果は本編記述のとおり良くない。ハスオビエダシヤクの大発生が長く続いたことから、農薬の空中散布の弊害や有効性の疑問も聞かれた。本研究会では、本種の種限定的な天敵ウィルス〈CPV〉による病死虫を見つけ出し、この人工的増殖を数年間にわたり行って、実用化段階まで達した。実用散布直前にハスオビエダシヤクの大発生が収束し、実現に至らなかった。

たが、いつかめぐってくる大発生に備えて、農薬を使用しない天敵ウイルスによる防除技術が継承されていくことを強く願っている。

平成 26 年に突如としてトビモンオオエダシャクの大発生があったので、ハスオビの例にならい、種限定的な天敵ウイルスによる病死虫がないか調査を進めている。

なお、白つくせ病他、今だ原因や伝染が判明していないツバキ樹の病害対策の確立が急がれる。現在、利島には種実の重要害虫ツバキシギゾウムシはいないようなので、他所からの持込、侵入が絶対無いように厳重な注意が必要なので、このチェック体制確立も早急な課題であろう。

平成 27 年 5 月吉日

顧問 松枝 章

〈利島椿研究会〉平成27年7月現在

梅田富也(会長) 手塚保夫(事務長) 梅田成彦(会計) 梅田新一  
梅田茂夫 大沼重則 笹岡寿一 梅田昭徳 小林春木 梅田和正  
青木繁行 井上吉夫 前田隆夫 片岡育真 梅田成彦 牧野洋二  
顧問: 尾川武雄 松枝 章

\* 敬称

文中一部に敬称を省略させていただいている部分があります。

\* 病虫害名について

紫紋羽病を紫モンパ病、白つくせ病を白ツクセ病など、学会の正式な表記法と異なる表記があることをあらかじめご了承ください。

\* 写真

写真は個別に記した以外、牧野洋二・松枝章が撮影したものを用いています。